
陽炎稲妻水の月

秋雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽炎稲妻水の月

【Nコード】

N3670T

【作者名】

秋雨

【あらすじ】

普通の生活をしていた篠原慧斗シノハラ ケイトは一人の少女と目があつたことにより不思議な物語に捕まった。

これはホラーですがホラーっぽくないかもしれません。むしろギャグに近いです。

全ての始まり（前書き）

初投稿です！

暖かい目で見てください

全ての始まり

「ふあっ……。あー、眠い」

耐えきれずに欠伸をひとつ（本音付き）。

「コラそこ、寝るな」

「先生、まだ寝てません」

「『まだ』ということは後で寝るつもりだな？居眠り常習犯」

「おふこーす！」

「発音悪いのに無理に英語話さなくていいぞ」

「ちよつとした茶目っ気です」

「……………はあ、もういい」

よし、先生に勝った。

1日に1回は起こる先生との言い合い。

大抵俺が勝つ。

「ふあー……………」

もう一度欠伸をして外を見る。

すると外には少女が1人。

あ、グラウンドじゃないからな？

窓越しだから。

いやー、随分長身な娘だなー。ここ、3階だぞ？

……………。

ギギギギ……………ときこちなく前を向く。い、今のは見間違いだ。夢だ。

白昼夢だ。

自分に言い聞かせてもう一度外を見る。

……………やっぱりいる。

少女と目があつた。

————ミツケタ

————ネエ、アソボウ？

俺を見ながら笑った少女。

その無垢な笑顔に恐怖を覚え、勢いよく前を向いた。

「この問題を篠原解けー」

当てられた俺は立ち上がる。

「……………わかりません」

「アホか」

言った瞬間に飛んできたチヨーク（赤）。

教育者のくせにそれはないだろ。

避けたけどな。

「昨日やったとこだぞ。今すぐ思い出せ」

「昨日っすか？んー、寝てました」

俺の一言でクラスが笑いに包まれる。

「はあ、もういい。次いくぞ」

呆れながらも先生は授業を再開した。

少女はもういない。

もしかしたらここから全てが始まっていたのかもな。

全ての始まり（後書き）

名前が出てこない……

次はちゃんと出てくるはず！

やってしまった(前書き)

早めに投稿できて良かったです

では、どうぞ

やってしまった

だるい授業がやっと終わり、廊下は下校する奴と部活に行く奴とで
ごった返している。

もうちよつと待つとくか。

「慧斗^{ケイト}、帰ろーぜー」

俺の前にのそーんと現れた竜真^{タツマ}。
慣れてるから驚かない。

心臓バクバクしてない。

「もうちよつと待つとけよ」

「待てねー！帰るんだー！」

「うるさい」

「ほびやつー！」

竜真の頭を鞆で叩いた仁^{ジン}。

お前もいつ来た。

「痛え！マジ痛えー！」

悶え苦しんでいる竜真。そのまま苦しんどけ。

「慧斗、これから遊びに行かないか？」

「お、行く行く」

「オレも！ゲーセン行こーぜ！」

もう復活したのかよ！

やけに早いな！

「ま、ゲーセンでいいか」

「だな」

人気が少なくなった教室を出た。

そのあと俺達は近くのゲーセンで遊びまくった。
その結果。

「今月の小遣いが……」

竜真の財布の中が悲しいことに。
はしやぎすぎるからだ。

「まだ月の初めなのに……」

「頑張つて乗り切れ」

「助けてくれよ！」

「は？何で俺がそんなことするわけないだろ」

「慧斗ー！仁が見捨てたー！！」

「へー」

「お前もかー！！」

周囲からの視線が痛いから叫ぶなよ。

他人の振りも出来そうにないな。

ケータイでも弄ろう。

確か鞆に入れたはず。

……あれ？ないし。

ポケットにもない。

あー、忘れたな。

「仁ー、慧斗がうどん節ー」

「拳動不審な。どうしたんだ？」

「ケータイ忘れた」

「あーあ、やつちやつたな」

竜真のニヤニヤ顔に拳を入れない。

「しゃーないから取りに戻るわ」

「んじゃ、オレら帰るな」

「気をつけるよ」

「お母さんかー！」

軽く漫才をして二人と別れた。

少年は歩む。

悪夢への入り口へと。

やってしまった(後書き)

名前出てきました！

そして人物が増えた……

次回をお楽しみに！

絶対壊れてるし(前書き)

これから投稿が遅くなると思われる秋雨です！

絶対壊れてるし

ついてないよなー。

なんで今日に限ってケータイ忘れるんだろ。
変な奴見たし、早く帰りたかったのに……。

まあ、ゲーセン楽しかったけど！

所持金半分無くなったけど！

調子に乗りましたけど何か！？

とか思ってたらか校門に着いた。

………なんだろ、入りたくない。

いつも通ってる学校が違う場所に見える。

なんかいつもとオーラが違うっていうか雰囲気が違うっていうか……。

とにかく何かが違う。

さあ、ここで選択しようではないか。

ケータイを諦めて帰るか、取りに行くか。

よし、取りにいくこう。

決めたらあっさりと校内に入った。

「うへえ、薄気味悪い」

日没時の校舎は思ったよりも気味悪い。薄暗さとか。

ケータイ取って早く帰ろ。

ガラスと教室のドアを開けた。

自分の席に行って中を探る。

お、あった。

よかったよかった。

さあ帰ろう。

クルッと向きを変えて早足でドアに近づく。

………怖くないからな！

キンコーンカーンコーン……キンコーンカーンコーン……

突然チャイムがなった。

「ほわっつ！？」

キンコーンカーンコーン……

今何時だよ！こんな時間に鳴らすんじゃない！近所迷惑だろ！？

キンコーンカーンコーン……

明らかに最後の音がおかしかった。

おいおい故障してんのかよ。

フフっ、クスクスクスっ

次は子供の声かよ。いやいや、チャイムに子供の声入れたら駄目だろ。

ネエ、オニイちゃん
アソボウ？

それは朝聞いた少女の声。

背中に悪寒が走った。

ヤバイヤバイ！

とにかくここから出ないと……！

ドアに手をかけて押す。

あ、開かねえ！

くそっ、蹴破つてやる！

後ろに下がって助走をつけてドアを蹴り飛ばした。
綺麗に吹っ飛んだよ。

……修理代どうしよう。

いや、それよりもここから逃げるんだ！
陸上部顔負けの速さでそこから逃げた。

ニガサナイヨ？

……GAME START

絶対壊れてるし（後書き）

短い！しかも内容薄い！

毎回短くてすみません……

物体丁と自由人（前書き）

仲間が増えます

物体Tと自由人

「ゼエツ、ハアツ……フウ。……んお？」

さつきから無我夢中で走ってたから気付かなかった。

「玄関ってどこだ？」

おかしいな。下に向かって走ってた筈なのにここは四階だ。

必死すぎて感覚がおかしくなったのか！？

……ふむ、まあ今は冷静だからいいか。

階段を見つけて一階まで降りて玄関に向かった。

……何故だ。

俺は玄関に向かった筈だ。なのに何故理科室の前にいる。ここは四階だぞ？

そういえば、さつきもここにいたな。

入れて事か？

「……上等だ」

ニヤツと笑ってドアを壊した。

修理代？何それおいしい？

理科室の中は外より暗い気がする。

「うへー、不気味ー」

確かここにスイッチが……っと、あったあった。

カチツという音と共に明かりがついた。

いつもと変わらない景色が目にはいる。

「何かあるかなーっと」

鼻歌を歌いながら探索開始。

さてさて、何が出てくるかなー。

一番出てきそうなのは標本にされた動物だよなー。あ、人体模型と
いう線もあるな。

あー、楽しみすぎる！

ワクワクしながら歩いていると、足の裏に変な感触が。

ま、まさか……………！！

唾を飲んで下を向く。

俺が踏んでいたのは苦しそうな物体、もとい竜真の腹。

「お前かあああああ！！！」

「ぐばおう！？」

ム力ついたから腹に踵落としを決めてやった。

ちくしょう、俺の期待を裏切りやがって！

「なんだ？今の鈍い音は」

物陰から人影が。

今度こそ！？

「ん？慧斗？なんでこんなとこにいるんだ？」

出てきたのは仁だった。

「お前もかあああああ！！！」

飛び膝蹴りを喰らわせたい！

飛びかかったら避けられた。

「何すんだよ。危ないな」

どこがだ。

あっさり避けやがって！

「チッ。で、なんでお前はこんなとこにいるんだよ」

「舌打ちは聞かなかったことにしとくな。しかもそれさっき俺が聞いたし」

そうだったか？

「ま、いいか。気付いたらここにいたんだ。そいつも一緒にな」

仁が指差したのは伸びている竜真。

そんなとこで寝るなよ。

「ったく、そろそろ起きろよ」

伸びている竜真に蹴りで止めを刺した仁。

おー怖い。「ぐばっ！な、なんでこんなおっぱか……………」

ふらふらと立ち上がった竜真は酔っ払いのおっさんみだった。

「ここにはもう用はないな。他のところに行くか」

「賛成」

「右に同じく」

ならさっさと出るか。

カタカタカタ……

静かな理科室に小さな音はよく響いた。

「竜真、遊ぶなよ」

「オレじゃねえよ。慧斗だろ」

「ちげえよ。仁か？」

「違う」

全員違うとなれば残る可能性はひとつ。

「やっと出てきた」

さあ、何が相手かな？

物体Tと自由人（後書き）

慧斗が怖くなった……

次はまた人数を増やす予定です

つざい骸骨（前書き）

長い間放置していてすみませんでした……

これからも更新は遅いです

うざい骸骨

カタカタ……カタカタ……

さつきから音しかしなくて地味に怖い。

つかさつさと出てこいよ！

待てども待てども出てこない相手に俺は苛立っていた。

「ひぎゃあああああ！！」

今まで黙っていた竜真が突然悲鳴をあげた。

「うつせえ！」

「だだだだだつて、オ、オレのかかかたつたたにいいいい……
っ！」

吃り過ぎ。日本語喋れ。

「肩がどうした？」

ああ、肩って言ったのか。

よくわかったな、仁。

「なんか、ある！」

「あー、その白いやつか？」

「多分それだよ！」

わかってんなら助ける！と騒ぎだした。正直五月蠅い。

「ファッションじゃないのか？」

「そんなわけねーだろ！？」

終いには半泣き状態。

チツ、しょうがねえな。

「竜真ー、しゃがめよー。怪我するぞー」

返事も聞かず、竜真の頭目掛けて蹴りを放つ。

「ひっ！」

竜真は髪を数本犠牲にして避けた。が、手応えはある。

俺が蹴ったモノは仁の所に飛んでいき、見事キャッチされた。

「ナイス、仁！それでパス！！」

そう言くとそれはすぐに飛んできた。

白くて固くて丸い、それは骨のような…………。

え、骨え！？

「！！！？」

思わず竜真にパス。

「？なんだ……………っ、ぎゃああああ！！！！」

叫びながら竜真も投げた。

『ああっ、ぼくの頭っ！！』

そう言いながら頭蓋骨を追いかける白い物体はなんだろうか。

『よかった、無事だ！。もう、君達乱暴だなあ』

カタカタと音をたてて怒る白い物体、もとい骸骨。

ああ、こいつか。

「がーいこーつくーん♪」

それはそれは人の良い笑みを浮かべ、俺は拳を握った。

「歯あ食いしばれ♪」

『え、ちよっと？あの、えっと……………ぼ、暴力反対！！』

泣き叫びながら骸骨は逃げていった。

てか、骸骨って泣くのか？

「結局何だったんだ？」

「「さあ」」

物語はまだ始まったばかり。

うざい骸骨（後書き）

慧斗が怖い！

本当は3人をビビらせようとしたのに……

ビビってたのは1人だけっていう。

何故！？

長過ぎなんだよ(前書き)

前回より早く投稿できました

長過ぎなんだよ

骸骨逃走後、俺達3人は適当にぶらぶらしていた。

今度は理科室に戻らない。

あー不思議。ま、あの骸骨のせいだったからからだろうけど。
今度会ったらぶっ飛ばしてやる。

「くくくっ」

「!？」

突然笑ったからか、隣にいた竜真が驚いた。
けど気にしなーい。

「さて、次はどこに行こうか」

「どこって言われてもな……」

「とりあえず歩かないか？」

「賛成ー」

というわけでひたすら歩く。

真っ直ぐ、真っ直ぐ。曲がらず歩く。

うん。曲がってない。はずなのに！

「突き当たりはどこだよ!!」

「うるさい」

叫んだら仁に叩かれた。

「だっておかしいだろ」

「まあ、そうだな」

なーぜーだー……。

「な、なあ……」

竜真がおずおずと手を挙げる。

「どうした？」

「さっきさ、ドア見つけたんだけど……」

「あ、それなら俺も見たな」

ナ又っ!？

「それを早く言わんか、馬鹿者！」

ちやぶ台があつたらひっくり返していた。確実に。

「気づいてると思ったんだよ！仁だって気づいてたし……」

「必要ないと思った」

「「いやいやいや」」

竜真はまだいいとしても、必要ないはないだろ。

「次からはきちんと言うように」

「「はーい」」

俺は幼稚園の先生か？

「じゃ、ドアのそこまでの案内よろしく」

「「ラジャー」」

いや、ないな。

さあ、次はナニ？

長過ぎなんだよ（後書き）

サブタイトルと違って本文短くてすみません

真っ白女（前書き）

最近調子が良い…

真つ白女

ドアには意外と近かった。

うん、まさか数歩歩いただけで着くとは思わなかった。

「もうちょっと先じゃなかったっけ？」

「いや、もっと先だつたらう」

2人の意見の食い違い。

「どこでもいいだろ。見つかったんならさ」

関係ナツ
シング！

「よし、入るぞー」

間髪いれずにドアを開ける。

後ろの竜真が五月蠅いけど無視。

どうせ仁が処理……ゲフン。対処するだろうし。

それよりもこっちが優先さ！

「次は何か出るのかなー」

目を凝らして中を見る。

んー？なんか動いてる……？

□ か…………… □

ずるり

返して……

ずるい ずるい

『私の……返して……』

ずるり ずるり

「返せええええええええええ！！！」

「つ、ぎゃああああ……!!!!」

うっせ！両方うっせ！！

とりあえず。

「黙れ竜真」

「おぶうつ……」

竜真を沈めておこう。

「ふう、良い仕事したな。さて、お化けさん？」

『ひっ！』

さっきまでの威勢はどこ行った。

「俺と遊ぼうぜ」

『ごめんなさいiiiiiii！』

おっと土下座されちまった。

つて、よく見るとこいつ女だし。

「おお、これぞ暴君……」

「仁、とりあえず黙れ」

「ラジャー」

さて、仁も黙ったし、こいつどうしようか。

「なあ」

『はいっ！！』

「そんなにおびえなくても何もしねえよ」

多分。

『あ、ホントに？よかったー』

土下座って結構きついなーとか言いながら立ち上がる……あー、白装束。

土下座やめていいとは言つてねえ。

「で、白装束。ここで何してたんだ？」

『白装束って私のこと？』

「それ以外に誰がいるんだ」

『んー、まいっか。何してたって……脅かしてた？』

疑問系かよ。

「よし、質問を変えよう。ここで何を探してた？」

『え、何も』

「はあ？返せ返せって言ってたのにか？」

『ああ、あれ？あれは演出だよー』

うん？なんかいらつときちやったぞ？

「慧斗ストップ。その拳を下げる」

「おつといけない」

無意識だったぜ

白装束ビビッてら。ぷぷつ。

『ごめんなさいごめんなさいだってしょうがないじゃないですか私の仕事なんだし大体どうしてビビッてくれないのさ普通の人ならビビってくれるのに』

「生憎と普通じゃないんで」

「右に同じく」

ちよつとした自慢だったり。

「うーん……」

おや？竜真が目を覚ましたようだ。

「あれ？オレなんで寝てたんだ？」

『あ、どうもー。ご機嫌いかが？』

「わあああああつ！……」

『そう、その反応が普通なのに！』

竜真と比べられたくないな。

口には出さないけど。

「さて、次行くか」

「何も無かったし」

「わーーーーーっ！……」

竜真も五月蠅いし。

「じゃあな、白装束」

『ばいばーい。……っつて、言うの忘れてた。ま、いつか』

別れた後に白装束が呟いてたことなんて知るわけないだろ。

真っ白女（後書き）

長くなってしまった…

なるべく見やすいようにしようと思います

誤字脱字があれば知らせてください

危ない奴に会ったらずく逃げろ（前書き）

サブタイトルに悩む今日この頃……

危ない奴に会ったらすぐ逃げる

白装束と別れた後俺たちは一階の廊下を歩いていた。
何で一階かって？

いや、片っ端から調べてみようって話になったんだ。
提案者は竜真だけど。

「なーんかこーいー　なーんかこーいー　なーんかー出るー♪」
「その歌やめろよ！」

替え歌歌ってたら竜真に止められた。
ちっ。

ビビリ過ぎなんだよ。

「このヘタレが」

「ヘタレじゃねえ!!」

「実際ヘタレだろ」

おっ、仁もこっち側か。

「ううっ、オレの味方はいないのかよーっ！」
いねえよ。

……テ………

ん？

「なあ、何か聞こえね？」

「何にも聞こえないけど」

空耳か？

……ケ………テ……

「やっぱり聞こえる」
空耳じゃねえ。

…テケ………テケ…

「ほら、テケテケって」
辺りが鉄臭くなった。

………テケ…テケ

「近づいてる………」

後ろか？

首を動かす。

ぱちっ。

後ろにいた奴と目が合った。

ニタリ

嗤った。

楽しそうに、俺たちを見て嗤った。

鳥肌が立つ。

危険だ、こいつは。

今までの奴とは違う。

早く逃げないと………！

竜真と仁はまだ気づいてない。

「竜真、仁」

「んお？」

「走るぞ。絶対に後ろを振り向くな」

「はっ？」

「………わかった」

仁は察してくれたが、竜真はわかっていない。
これだから馬鹿は。

「とにかく走れ。……行くぞ！」

俺の声を合図に走り出した。

『逃ガサナイ』

テケテケテケテケテケテケ……
ズルズルズルズルズルズル……

上半身を引きずりながら進む音と足音が廊下に響いて消えていく。

さア、愉シい鬼ごっこノ幕開ケダ

危ない奴に会ったらすぐ逃げる（後書き）

今回はホラーっぽくしてみました

いかがでしょうか？

慧斗が歌っていた替え歌の原曲は何かわかりましたか？
わからない方は感想を送ってください

あ、ヤベエ（前書き）

記録更新中の秋雨です

ちよっとうれしかったです

あ、ヤベエ

逃げる、逃げる

奴は迫ってきている――

「ハッ、ゼッ、いつまで、走るんつ、だよっ！」

「あいつを、撒くまで、だ！」

「あいつつて、誰！」

「知りたいんならっ、後ろ、見ろ！」

余程知りたかったのか、2人は瞬時に振り向いた。
ら、すぐに後悔したらしい。

顔が真っ青。

「何だよ、あれ！」

「知らねえよ！とにかく逃げろ！」

――捕まるぞ

「それだけは嫌だ！」

心なしか竜真のスピードが速くなった。

よし、それで良い。

とにかく速く、走る、走る。

ふと、違和感を感じる。

おかしい。何だ？何かがおかしい。

なんだ？何だ？考えろ、考えろ。

……あ、わかった。

奴の動く音がしないんだ。

いつの間にか俺たちの足音だけになったんだ。

よかった、撒けたんだ……。

わかったら何か安心して、足を止めた。

「慧斗！？何止まってるんだよ！」

「走るぞ！」

「いや、多分もう大丈夫だ。俺たちの足音しかない」

「え？……あ、ホントだ」

「撒けた……のか？」

「ああ」

その場突っ立って息を整える。

こんなに必死になって走ったのは久しぶりだな……。

目を閉じて息を吐きながら天井を仰ぐ。

そしてゆっくりと目を開けた。

……嘘だろ。

金縛りにあったみたいに体が動かない。

冷や汗がどつと流れてくる。

なんで、ここにいるんだ。

ちゃんと撒いたはずなのに。

「慧斗？おい」

「どうかしたのか？」

上を向いたまま動かない俺を心配して2人が話しかけてくるが、応できない。

ポタリ

頬に雫が落ちてきた。

すぐ近くで鉄の臭いがする。

『見ーツケた』

天井にへばりついてた奴は、俺に向かって一直線に落ちてきた。片手に鎌を持って。

あっちゃー、こりゃ死んだな。

奴にやっと気づいた2人が焦ってるけどもう遅い。

奴との距離は2メートル。全てがスローモーションになった。

1メートル…… 80センチ…… 50センチ…… 20センチ……。

そして10センチをきった。

そこで、奴は消えた。

いや、正確に言うとかき飛ばされた。

原因は簡単。

白いあいつに蹴り飛ばされたから。

『ギリギリセーフ！間に合ってよかったー』

そう、カタカタと音を鳴らしながら喋るこいつによって。

『正義の味方登場！』

どう？かっこいいでしょ！？と騒ぐこいつを殴りたくなったのは仕方ないと思う。

あ、やべえ（後書き）

折角ホラーにしたのに結局はギャグになってしまっ……

通称コッシー（前書き）

三週間経ってようやく投稿です

通称コッツー

『あれ？何で固まってるの？』

不思議そうに首をかしげる骸骨。

「そういうお前は何でここにいる」

確かこいつは俺に怯えて逃げたはずだ。

……………多分！

『いやあ、あの後君達のことになって尻行してたら案の定テケさんに殺されそうになってたんだよね』

尾行してたらよかったとか笑っている(?)こいつにつっこみたいことは数個あるが、とりあえず。

「つまりストーキングしてたんだな」

「うげっ」

竜真と仁も顔を歪めて冷めた目で骸骨を見た。

『えっ、ち、違うよ！？そんなじゃないよ！？』

骸骨が弁解を始めたがもう遅い。

『違うんだああああ！！』

無視し続けたら骸骨は泣き出してしまった。

骸骨のくせにどこから涙出してんだよ。

『ヴ……………ア……………許さなイ……………』

今までピクリとも動かなかったテケさん(骸骨がそう言ってたから合ってると思う)が動き出した。

骸骨に蹴られたせいで内臓が出ている上に血を撒き散らしながら微妙に動いていて気持ち悪いことこの上ない。

『そうだ、こんなことしてる場合じゃないんだっ！君達、早く逃げよ！』

「……お、おう」

泣いていた骸骨がいきなり走り出すからビビったけど、テケさんにまた追いかけられるのも嫌だから素直に骸骨を追いかけた。

『あアアああア あ あ ！！！！』
後ろからテケさんの叫び声が聞こえてきて心なしかスピードが上がった。

『…………ふう、ここまできたら大丈夫かな』

骸骨に連れられてきたのは2階。

『君達大丈夫？』

『なんとか…………』

『それよりさっきのは何だったんだよ』

『もちろん説明してくれるよな？』

笑いながら問いかけたらなぜか怯えられた。

理由？わかんない。H A H A H A。

『さ、さっきのはテケテケだよ。通称テケさん』

テケテケ……。聞いたことある気がするな。

『テケさんは凶暴だから捕まらないようにね』

『捕まるとどうなるんだ？』

『ん、上下真つ二つかな』

それを聞いた竜真の顔が面白いぐらい真つ青になった。

目もガン開きだし。

『逃げきれてよかった…………』

『じゃあ今度はお前のことな』

『ぼく？ぼくは見たとおりの骸骨だよ。親しみを持ってコッツツ

て呼んで』

『よし骸骨。最後にここからの脱出方法を教えろ』

『あ、あれ？コッツツって…………』

『が・い・こ・つ』

『はい…………』

左右からの視線が冷たいのは気にしない方向で。

『ここから出るにはこの怪談をクリアするんだ』
なんてベタな。

「ちなみにどのくらい？」

『まずさっきのテケさん、トコさん、ぼく、花ちゃん、くーちゃん、人体模型くん、髪長さん、めーちゃん、たっくんの9人だね』

「げえ……」

おいおい、情けねえな。

「まあ、つまりそいつらを倒せばいいんだろ？」

『そうだよ。皆なんかしてくると思うから気をつけてね』

なんたつて久しぶりの人間なんだから。

そういう骸骨はどこか嬉しそうだった。

「そつえば、お前に捕まるとどうなつてたんだ？」

『いい質問だね、自由ボーイ！ぼくに捕まったら皮を剥がしてたよ！まあ、昔の話だけどね』

おいこら竜真。俺の後ろに隠れるなよ。

「なんでやめたのかいいかい？」

『飽きちゃったんだよ。取っても腐っちゃうし、その繰り返し。つまらないんだ』

「そうか。それで、お前をクリアするにはどうすればいい？」

『ぼくはもうクリアでいいよ。結構楽しませてもらったしね』

「よかったあ……」

やっと安心したのか俺の後ろからヘタレ（竜真）が出てきた。

「そうだな、クリアじゃなかったら粉々にしてたぜ」

握り拳を作ったら骸骨は光の速さで仁の後ろに隠れた。

ヘタレ二号かよ。

『はっ、早く次に行きなよ！』

「言われなくても」

お供を従えにいざ出発！

え、違う？あつてるって。

そつえばあいつが言ったの通称だけで本名わかんねえな。

通称コッツー（後書き）

通称だけでどんなのが出てくるかわかりましたか？

1つだけでもろわかりですけど

思ってますが、季節外れのホラーを見てくれる人なんているんでしょうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3670t/>

陽炎稲妻水の月

2011年10月29日15時18分発行